



本書の主人公和田俊之が東京教育大学に入學した一九六六年は、私が京都の立命館大学に進學した時と重なる。私はこの作品を読んで、東京と京都の地にあつて、極左暴力学生と学園民主化、ひいては日本の変革のために燃え、闘つた青春は相呼応するものだったとの感慨をあらためてかみしめさせられた。本書には三篇の作品「初雪の夜」「もう一度選ぶなら」「残照」が収録されている。二編は創作であり、あと一篇の「残照」は二作品内容の実録としての性格を帯びて、主人公も同一人物である。

「残照」の中で、七十五歳になる俊之は「その後の人生のすべてがここから始まっている」と述懐している。それは自由と民主主義の精神が柱になつてゐる大学や学友との交流

の中で俊之がその後の生き方の精神的、思想的バックボーンを体

得したことを意味している。私も立命館大学のわだつみの像に象徴される反戦平和の誓いに強く引きつけられて、「その後の人生」の方向が決まらぬ定づけられた一人であるので強く共感するものがあつた。

さらに「初雪の夜」で大学入学前の浪人時代の俊之の心情が描かれてゐるが「厭世的」で「爆発寸前の状態」にあり、「残照」の中では「民主主義」という言葉は、大学に入るまでは胡散臭いさかつた、ということでも、まさに私自身の思想レベルでもあつた。そうした俊之が大学の「筑波移転」闘争に若き炎を燃やす中で自由と民主主義の精神を体現してゆく過程は、大学紛争の中で、何が真実なのか、社会の仕組み、そのからくりの一端を権力が暴力学生を泳がす実態を生々しく体験する中で劇的に自己変革を遂げた私の精神遍歴とピタリと重なるのである。闘争の中で俊之の自己変革はまず「初雪の夜」で大学寮のストープ設置要求署名運動で、学友に「ストープぐらい自分で買つたら」と侮蔑される

が、それを乗り越えることで自分が変われると、怯みながらもついにその学友から署名を勝ちとることで第一歩が始まる。さらに「もう一度選ぶなら」では「筑波」への大学「移転」反対闘争でのポスター貼り弾圧で、警察に検挙された折、取調室に聞かえて来る「不当逮捕を許さないぞー学友を返せ」のシユプレヒコールに「俊之は、人生の中で一番凍々しく「怖いものは何もなくなつた」と描写されている。この場面では、私も全共闘学生と激突する直前、小水ももらすほどの恐怖感があつたが、暴力への、権力への憤激がそれを越えさせ、己の勇気を発見した体験があつたので、思わず膝を打つた場面であつた。

この作品集には、人間は変革されてゆくものだという主張が強くあり、俊之にとつてはその場が東京教育大学であつたが、また全国の多くの青年学生にとつても共通するものであつたらうと思えるのである。まことに、青春がまぶしく映る作品集である。

(本の泉刊 一二〇〇円)